

## アルコール依存の地獄から 救われたのは、懺悔と思いやる心。

名古屋西教会 安藤尚弘さん

安藤さんは、父親が一代で築いた機械部品の製造会社を継いだ。「自分に務まるか…」という不安、折からのバブル崩壊の不景気も重なって、それを打ち消すために酒の力を借り、やがて一日中アルコールに浸るようになっていった。家族も会社の従業員も安藤さんを守り立てようとしたが、重度のアルコール依存症で入院。最悪の事態に陥ったが、立ち直るきっかけでもあった。退院後、工場で額に汗して働く従業員の姿を見て、同じ過ちは繰り返すまいと心に誓った。だが、その矢先、妻が乳がん罹患者。安藤さんは、苦勞をかけてきた妻に対する罪の意識に苛まれ、一心不乱に快復を祈り続けた。それが百日間を過ぎた頃、無事に退院。気がつけば、祈り続ける日々は酒の誘惑を忘れさせ、断酒を継続していた。妻が身をもって救ってくれたのだ。アルコール依存症とは、現在も闘っている最中だが、「家族、従業員に支えられたおかげで、いまこうして私は生きている。生かされている」と気づいた安藤さんの目は、まっすぐ前を向いている。



## 仰いで 天に愧じず

私たちは、自分が恥ずかしいと思うことや、自分にやましいことはしないという心の姿勢を、「恥を知る」という言葉で昔から大切にしてきました。しかし、私たちがときに利欲の誘惑に負け、人として恥ずかしいことをするので。なかには、嘘をついたり悪いことをしたりして、それを恬として恥じない人もいます。

ただ、仏教で十界互具と説くように、人はみな、心なかに欲得づくの「私」もいれば、清廉潔白な「私」もいます。地獄や餓鬼のような、自己中心で浅ましい心から、思いやり深く、人に尽くすことを喜びとする仏・菩薩の心まで併せもっているのが人間であるということです。だからこそ、いつも「自分にやましいことはないか」と省み、仏・菩薩の心に帰ることが大切なのではないでしょうか。神仏を仰ぎ、敬い、神仏と向きあうときに生まれる「自分はまだまだ至らない」という慚愧の思い。それは、積尊が「恥じることを知る心は、どのような衣服よりも人を清く、美しく飾る」といわれるとおり、私たちの人間的成長に資する原動力となるのです。その意味で「仰いで天に愧じず」とは、偉大なるものに少しでも近づこうとする人間性豊かな生き方といえるのです。

# 立正佼成会